

2016 年 9 月 16 日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 1 8

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

補遺 1 0 において、山路諧孝らの『重訂万国全図』がゾルの世界地図に基づいて実際のパラセルを南シナ海に記載していること、その地図の作成に佐渡出身の洋学者柴田収蔵が参加していることを指摘した。最近になって、沼津の蘭学医武田簡吾が幕末に翻訳した地図に、やはり実際のパラセルが記載されていること（記述はあまり正確ではないが）に気がついた。この地図にはさらにスカボロー礁も記されている（19 世紀の中国の資料でスカボロー礁に言及したものがあることを私は知らない）。

この地図は早稲田大学の古典籍総合データベースで見ることができる。

庸普爾地輯；武田簡吾訳『輿地航海図』沼津：樹徳堂、安政 5（1858）。

1858 年に沼津でこの地図が刊行されてから 4 年後の 1862 年に、戊辰戦争期に武器商人として暗躍するプロシア人スネル兄弟の弟エドワルド・スネルが、横浜でほぼ同じ地図を出版している（スネルについては[石塚 2011:134-153]。）

庸普爾地輯；武田簡吾訳『万国航海図 *A Map of the World in Japanese*』Yokohama:Ed. Schnel, 1862.

さらにこの地図に万国国旗の一覧を付した別の版（海賊版？）も存在する（いずれも早稲田大学古典籍総合データベースで見ることができる）。武田簡吾訳の地図に関心を寄せる日本人がいたことは間違いあるまい。

『輿地航海図』については、藤田元春がつとに考証を行っている[藤田 1932]が、1854 年に日露和親条約を結ぶためにプチャーチンが下田に来たときにその乗船ディアナ号が大地震で大破し沈没、その船中にあった海図を武田簡吾が書写翻訳したものとされている。ロシア船で使用されていた痕跡として、『輿地航海図』には原図に描かれていない 1853 年にプチャーチンが長崎に来航したときの航路が記されている。

武田は 1845 年に庸普爾地（John Purdy）が出版した地図を翻訳したと記している。John Purdy の海図はテキサス大学アーリントン校図書館が所蔵しており、ウェブサイトで見ることができる。

*A Chart of the World on Mercator's Projection: Reduced from the large chart by*

*J. Purdy*, 1824.

<https://texashistory.unt.edu/ark:/67531/metapht193446/>

この地図は、その後も版を重ねたようであり、Purdy の死後の 1845 年に Findlay が増補をして出版した彼の著作の末尾の刊行物の宣伝 (Nautical Works, Lately Published by R.H. Laurie, and sold also by all the respectable chart-sellers in the different ports of the United Kingdom) の冒頭に THE WORLD, on Mercator's projection, upon four sheets of Grand Eagle paper, by John Purdy が記載されている [Purdy & Findlay 1845]。John Purdy が 1824 年に初版を刊行した世界海図の 1845 年版を武田簡吾が翻訳したということなのであろう。

Purdy の 1824 年の海図には、Paracels, Amphitride I., Macclesfield Bk., Scarborough S. が明確に記述されている。世界図ということもあつてか、Macclesfield Bk. がやや南よりに描かれているなど微妙に不正確なところはあるが、この海図においても、イギリス海軍水路局の調査にもとづく新たな情報を踏まえて、実際のパラセルを描かれていることが確認できる。武田簡吾はこれらをプラッセル洲、マッカレス洲、スカルブロ洲と訳している。Amphitride I は何故か訳していない。武田簡吾はオランダ語が専門で英語は得意でないと自ら述べているが、英語力の不足のため残念ながら大きな間違いを犯している。Purdy の地図では、南シナ海の真ん中あたりに "Numerous Shoals"、現在のスプラトリー諸島の南方に "Dangers" と記しているが、武田はこれらを固有名と勘違いして、ニューメロウス洲、ソアルス洲、ダンゲル洲と訳してしまっている！（もっともスネルが出版した地図もこれらの誤りを踏襲している。）。

イギリスの hydrographer の作成した海図をロシア船が日本にもたらし、それを入手した沼津の蘭学医が翻訳出版、それを日本在住のプロシア人が横浜で再版する。19 世紀前半から中葉にかけてのグローバル化の趨勢を反映した出来事といえよう。とくに日本の地方の知識人が 19 世紀前半における南シナ海に関する地図表現のグローバルな標準化の動向の末端につらなっている（小さからぬミスはあるが）ことは注目に値する。

Purdy, John & Findlay, A.G. 1845. *Memoir, Descriptive and Explanatory, to accompany the charts of the Northern Atlantic Ocean* 9<sup>th</sup> edition. London: R.H. Laurie.

石塚裕道. 2011. 『明治維新と横浜居留地：英仏駐屯軍をめぐる国際関係』東京：吉川弘文館.

藤田元春. 1932. 「武田簡吾訳輿地航海図」『日本地理学史』東京：刀江書院.